The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

道元禅師における『法華経』解釈の一考察

清野宏道

序

道元禅師が自らの仏法を形成する上で『法華経』に多大な影響を受けていることは、よく知られた事実である。しかし『正法眼蔵』「法華転法華」巻に記される内容からは、禅師が従来の『法華経』解釈をそのまま受容し、提示してはいない様子が窺える。本稿では、「法華転法華」巻に詳述される六祖慧能（以下、慧能）と門人法達の問答を中心に、中国禅宗における『法華経』受容の様子と禅師における『法華経』受容の様子の差異を考察し、それを通路として禅師の『法華経』理解の一端を探りたい。

一　「法華転法華」巻の構成

「法華転法華」巻は（道元禅師の著述の中では希有な一経典に焦点が当てられて記された）巻である。その内容は大きく三段に分けられる。第一段では「方便品」を中心とした『法華経』各品の要所が様々に引用されており、禅師の『法華経』に対する意識が窺われる。第二段では『景徳伝灯録』（以下『景徳』）における慧能と法達の問答、言い換えれば、禅師の法華転法華という法華思想の基盤となった慧能の法華思想が引用されている。第三段では、第一段と第二段を踏襲した上で、禅師の『法華経』解釈とその展開が提示されている。「法華転法華」巻の構成は、概ね以上のようである。

二　法華転・転法華

法華転法華という法華思想は、『景徳』における慧能の心迷法華転・心悟転法華という説を母体として、道元禅師が独自に開演した法華思想なのであるが、禅師はその慧能の説をそのまま受容してはいない。慧能の説を一段跳出したところに、法華転法華という思想を打ち出すのである。

それはなぜか。私見を申せば、慧能の説は決して『法華経』そのものに対して解釈されたものではなく、慧能が自身の説

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

く無念説を肯定する為に打ち出した説だということができるからである。また、この法華転・転法華の説は慧能のみが有していた説ではなく、広く中国南宗禅において依用された説であるということも指摘される。以下にその事項を挙げ、各々について考察を試みる。

①無念即無生。無念即無遠。無念即無近。無念即是史法華。有念即是法華史。無念即是転法華。有念即是法華転。正無念之時。無念不自。

〈無念は即ち無生、無念は即ち無遠、無念は即ち無近、無念は即ち是れ史法華、有念は即ち是れ法華史。無念は即ち是れ法華を転じ、有念は即ち是れ法華に転ぜらる。正しく無念の時、無念は自ならず。〉

『歴代法宝記』（『大正』五一、一九二頁、上）

②心行転法華。不行法華転。心正転法華。心邪法華転。開仏智見転法華。開衆生智見被法華転。

〈心、行ずれば法華を転じ、行ぜざれば法華に転ぜらる。心、正しければ法華を転じ、心、邪なれば法華に転ぜらる。仏智見を開せば法華を転じ。衆生智見を開せば法華の転ぜらるなり。〉

敦煌本『六祖壇経』（『大正』四八、三四三頁、上）

③心迷法華転　心悟転法華　誦久不明己　与義作讎家
無念念即正　有念念成邪　有無俱不計　長御白牛車

〈心迷えば法華に転ぜられ、心悟れば法華を転ずる、誦すること久しくも己を明らめざれば、義と讎家と作る、無念の念は即ち正、有念の念は邪を成ず、有無俱に計せざるに、長く白牛車に御せん〉

『景徳』法達章（『大正』五一、二三八頁、上）

①の文は、七七四年成立の『歴代法宝記』の記事である。これは師（恐らく無住）に参じ来た一行と慧明の兄弟僧に対しての説示である。この説示の前に師が『法華経』「安楽行品」の一切諸法空の所以を兄弟に問うが、兄弟は答えられなかった。そこで教示されるのがこの一節である。ここではその「安楽行品」の一切諸法空に対応させた形で有念・無念なる法華転・転法華の説が提示されている。言い換えれば、一切諸法空なるが故の無念なる転法華が提示され、それによる無念の絶対性が説かれていると見ることができる。となれば、ここでは一切諸法空としての無念を提示する為に法華転・転法華の説が提示されていると見ることができよう。

②は『六祖壇経』最古の写本として知られる敦煌本『六祖壇経』における法華転・転法華の説である。当書で法華転・転法華が説示されるのは『景徳』同様、法達に対してであるが、内容は『景徳』のそれとは若干異なる。②の文を提示するに当たり、慧能は一大事因縁にして心の本源が相離相・空離空にして畢竟空寂なることを明らめ、一念に開示悟入の四仏知見の心を開することを法達に説き示している。そして、その為には心が正定、いわゆる無念でなければならないことを説くのである。言い換えれば、無念の心にして開示悟入なる自己の仏知見を開演することを、法華転・転法華の説を用いて提示しているのである。

③は『景徳』の説である。ここで慧能は法達に対し、心迷・心悟なる法華転・転法華を説示するのであるが、「誦するこ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

と久しくも己を明らめざれば」とあるように、これは自心即仏を前提とした上での説示であることがわかる。更にその後に「無念の念は即ち正、有念の念は邪を成ず」と無念・有念の正・邪が説かれていることから、有念なるは心迷の法華転、無念なるは心悟の転法華ということが理解できよう。つまり慧能は、無念なる自心即仏を説く為に心迷・心悟の法華転・転法華を提示しているといえるのである。

以上が中国における法華転・転法華の説である。これらに通底することは、その全てが中国南宗禅系統の典籍に記されるもので、南宗禅の説く無念説を絶対的に肯定させる為に法華転・転法華と心の正・邪、つまりは、無念・有念とが重ね合わされて提示されていることである。故に法華転・転法華の説は、南宗禅が自身の説く無念説を絶対肯定させる為に『法華経』の権威を借りて打ち出した、南宗禅独特の『法華経』依用の一形態だと推察されるのである。

因みに、法華転・転法華説の母体は達磨の『二入四行論』第八の心の論理的解釈にその基盤を見出すことができる。

三蔵法師言、不解時人逐法、解時法逐人。解則識摂色、迷則色摂識。不因色生識、是名不見色。不求於求、求於無求、亦是汝求。不取於取、取於無取、亦是汝取。心有所須、名為欲界。心不自心、由色生心、名為色界。色不自色、由心故色、心色無色、名無色界。〈三蔵法師言わく「解らざる時は、人が法を逐い、解る時は法が人を逐う。解るときは則わち識が色を摂め、迷うときは則わち色が識を摂む」。色に因って識を生ぜざるを、是れを色を見ざると名づく。求を求せざるも、無求を求とするは、亦た是れ汝が求なり。取を取とせざるも、無取を取とするは、亦た是れ汝が取なり。「心が須うる所有るを、名づけて欲界と為す。心は自から心ならず、色に由って心を生ずるを、名づけて色界と為す。色は自から色ならず、心に由るが故に色なれば、心と色とが無色なるを、無色界と名づく」〉　『達磨の語録』（『禅の語録』一、六八―六九頁）

以上の『二入四行論』に記される法と心の論理構造が基盤となり、慧能によって法華転・転法華の説が開演され、以降、広く中国南宗禅で依用されたであろうことは推測に難くない。

三　法華転法華

先の通り、中国における法華転・転法華の説は、有念・無念を、言い換えれば南宗禅を脱し得なかった。故に、いかに言を変えようとも南宗禅における無念説を肯定化させるための方法論に止まったのである。しかし、それを踏まえた上で道元禅師は以下のように説示する。

あらゆる如是は珍宝なり、光明なり、道場なり、広大深遠なり、深大久遠なり、心迷法華転なり、心悟転法華なる、実にこれ法華転法華なり。

心迷法華転、心悟転法華、究尽能如是、法華転法華。〈心迷は、法華転なり、心悟は転法華なり、究尽なること能く是の如くならば、法華の法華を転ずるなり〉

『正法眼蔵』「法華転法華」巻（『全集』二、四九七頁）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ここで禅師は「究尽なること能く是の如くならば」、法華転法華の境地に到ると説く。つまり心迷・心悟という相対的理解に止まっていた慧能の法華転・転法華の説を法華転法華という絶対的理解へと昇華させたのである。

更に禅師は、言を重ねて以下のように説く。

かくのごとく供養、恭敬、尊重、讃歎する、法華是法華なるべし。

『正法眼蔵』「法華転法華」巻（『全集』二、四九七頁）

禅師は法華転法華の「転」を「是」とする。法華転法華では「転」に対する主体と客体は同格であるが、そこに「転」という転換作用が働くことになる。畢竟、これでは法華の絶対認識にはならない。法華を絶対的に認識するのならば、「転」ではなく「是」という『法華経』本来の位置に帰結させる必要があったのであろう。

仮に禅師が提示するところの法華が絶対的存在たる仏法であれば、それは正に自己であり、尽十方世界となり得よう。そのように見ると、この法華是法華という解釈は、これら全てを絶対的に一元化させた禅師の法華解釈なのではないかと考える。つまり、禅師は自らの仏法、言い換えれば正伝の仏法そのものの絶対性を『法華経』の世界に重ね合わせ、自己・仏法・尽十方界の同一現成という意識を法華是法華として提示しているものと推察される。

四　小結

ここで指摘されることは、慧能の法華転・転法華の説は、禅師の説とは異なり、あくまでも自心即仏にして無念ならんとする中国南宗禅の無念説を正当化させる為に提示された『法華経』依用の一形態であって、決して『法華経』そのものに対して打ち出された思想ではないといえよう。また、その法華転・転法華の説は、慧能のみが有していた説ではなく、広く中国南宗禅で用いられた説で、その全てが慧能と同様の意識の下に展開されている説だということも指摘できよう。一方、禅師は、その慧能の法華思想を踏襲しながらも自己の仏法と『法華経』そのものの世界を対峙させ、法華転法華にして法華是法華なる独自の『法華経』観を打ち出すのである。

以上より道元禅師は、慧能の法華転・転法華の説を受容しながらも、それをそのまま提示するのではなく、その上に独自の法華思想を開演したものと推察される。故に、禅師の法華転法華思想と慧能の法華転・転法華説は一線を画すものであり、両者の説は根本的に異なる思想として認識しなければならないものと推定したい。

今後は天台教学との関連性も視野に入れ、考察を行いたい。

〈キーワード〉『法華経』、道元、『正法眼蔵』、「法華転法華」

（駒澤大学大学院）

NII-Electronic Library Service